●ベルタ・ロハスのアルバム『Día y Medio』が2012年ラテン・グラミー賞にノミネート

ギタリストのベルタ・ロハスは、これまでソロCD数枚とカルロス・バルボサ＝リマとのコラボCDを製作してきたが、それに加えて、グラミー賞を数多く獲得しているサクソフォン奏者兼クラリネット奏者のパキート・デ・リベーラとの最新コラボCD〈Día y Medio（1日半）〉をリリースした。これが2012年ラテン・グラミー賞ベスト・インストゥルメンタル・アルバム部門の受賞候補にノミネートされた。

このアルバムが作られたのは、彼女がパキート・デ・リベーラと行なっている4部構成のコンサート・ツアー『バリオス・マンゴレの足跡』がきっかけだった。このツアーの目的は、バリオスが生涯をかけて演奏旅行したすべての国を、2人で訪問することである。

ロハスとデ・リベーラは、2011年にチリとアルゼンチンで演奏した後、ウルグアイに行ったが、そこではカルロス・バルボサ＝リマと共演した。

「2人が訪問したすべての国で、その地の著名なギタリストが共演してくれました。アルゼンチンでは、カルロス・モスカルディーニ、カルロス・マルティネスとアグスティン・ルナ、チリでは、ルイス・オルランディーニとロミロ・オレジャーナ、ウルグアイでは、マリオ・パイセー、ラミロ・アグリエとアナ・イネス・ゼバジョスなどが参加してくれました」とロハスは語った。

「私が驚き、そして光栄に思ったのは、“何もかもすべて上手く行ったのだから、このデュットをアルバムにしようじゃないか”と、パキートが言ってくれたことです。早速、関係者でブレイン・ストーミングを始め、結果として生まれたのがこのCDです」

キューバ出身のデ・リベーラは、オルケスタ・クバーナ・デ・ムジカ・モデルナの創設者であり、伝説的なキューバン・ジャズ・バンド“イラケレ”のオリジナル・メンバーでもある。グラミー賞6回、ラテン・グラミー賞を5回獲得しているが、クラシック部門とラテンジャズ部門の双方でラテン・グラミー賞を獲得した最初のアーティストである。アメリカ芸術メダルの受章者でもある彼は、ジャズ、ラテン音楽、ビーバップ、クラシック、さらにロンドン・フィルハーモニー管弦楽団やロンドン交響楽団との共演など、これまでのキャリアで製作したソロ・アルバムの数は、優に30枚を超えている。作曲家としても、ジョン・サイモン・グッゲンハイム作曲部門の奨学金を授与されており、クラシック界とジャズ・コミュニティのための、数多くのアメリカ芸術組織の理事をしている。

ロハスとデ・リベーラが、エンジニアのマルセロ・コルナットのプロデュースのもと、レコーディングを開始したのは2012年2月、ワシントンDCでのこと。完成するまで1週間を要した。

「この1週間は非常に集中しました」とロハスは言う。

「1日約16時間働きましたが、デ・リベーラと過ごした時間は、本当に楽しいものでした。パキート・デ・リベーラは、音楽家として優れているだけではなく、人柄が素晴らしい。この新しいアルバムの製作には、ミキシングのダニエル・フライバーグ、マスタリングのアラン・シルバーマンが、終始協力してくれました。彼らの仕事は完璧です」

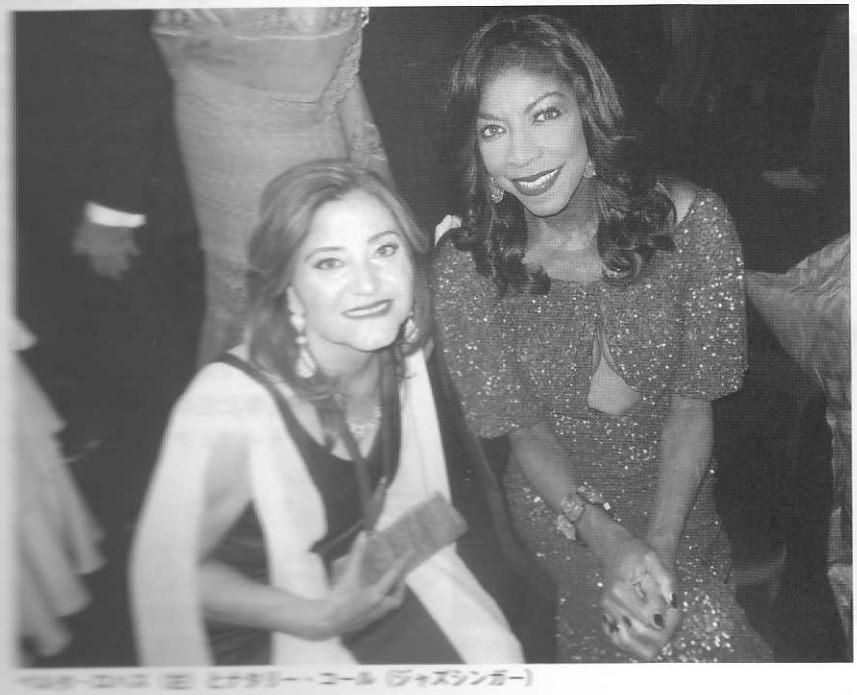
このアルバムのタイトルは、パラグアイの地方紙に掲載されたパキートのインタビュー記事の中から、ロハスのグラフィック・デザイナーであるセレステ・プリートが直感で選んだ。

「我々は何か閃くようなものを求めていたのですが、ディアリオ・ラ・ナシオン（*Diario La Nacion*）紙の記者であるチャーリー・ヒメネスが書いたパキートのインタビュー記事を読んで発見したのです」とロハスは言う。

「短期間の滞在でしたがパラグアイの印象はいかがですかと、ヒメネスがパキートに質問すると、彼は“1日半”では不充分だと答えたのです。アルバムのタイトル『1日半』は完璧だと思いました。というのは、パラグアイのリズムとメロディーを通じて、聴く人にパラグアイを一目見る機会を与えることはできても、パラグアイという国全体を知らせるには充分ではないからです」

製作に5ヵ月を要したこのアルバムは、2012年5月15日にリリースされた。

フォークとクラシックにデ・リベーラ


ベルタ・ロハス（左）とナタリー・コール（ジャズシンガー）

ベルタ・ロハス

のジャズ・スタイルをミックスしたクロスオーバー・プロジェクトと言われるこのアルバムには、全部で12曲が収録されている。

アルバムはアグスティン・バリオスの詩的でクラシカルな作品〈蜜蜂〉と、ブラジリアン・ダンスのリズムを大胆に導入した、デ・リベーラによる〈マシーシ〉のダイナミックなヴァージョンで始まる。

デュオで演奏される〈イパカライの想い出〉は、作曲者がイパカライ湖畔に立ったときにインスピレーションを受けた美しい女性をイメージして書かれたノスタルジックな作品。優雅さを持った伝統的なパラグアイの“グァラニー”のリズムを反映している。

アルゼンチンの作曲家ギジェルモ・ブレールが1945年に作曲した〈チョグイ鳥〉は、若くして死んだインディアンが、“オレンジの木の鳥”と呼ばれるチョグイあるいはナランジェロという名の青い鳥に生まれかわった伝説を曲にしたもの。この作品では、デ・リベーラの思い悩むようなジャズ・バラードのメロディーを、ベルタ・ロハスのギターがアルペジョで強調している。

バリオスがバッハに触発されて書いた〈前奏曲ハ短調〉では、アレンジャーのマウリシオ・“ピンチ”・カルドーソ・オカンプが、メロディー・ラインで、バリオスとピアソラを融合させることによってギターとクラリネットの知的な対話を作り出している。

エルミニオ・ヒメネスの〈木の独楽〉は1937年に作曲された作品で、子供の頃、独楽で遊んだ楽しい思い出をイメージした作品。

デメトリオ・オルティスの〈君のいない夜〉は、作曲者が母に寄せた思いを主題とするグァラニー音楽である。

このアルバムでは、さらにホセ・アスンシン・フローレスのロマンチックな〈チョーリ〉、マリオ・クラベル〈貴方と何時も一緒に〉、バリオス〈カアサパ〉、ノスタルジックな〈郷愁のショーロ〉、最後はバリオスが伝統的なリズムを使った〈パラグアイ舞曲〉を演奏している。クラシックギターとジャズ・クラリネットの競演が、良く知られた作品を、まったく新しいコンテンポラリーな響きに変えている。

レオ・ブローウェルが作曲部門でラテン・グラミー賞にノミネートされ、ペペ・ロメロがベスト・クラシカル・アルバム部門でノミネートされたのと同時に、ベルタ・ロハスとパキート・デ・リベーラは、2012年ラテン・グラミー賞のベスト・インストゥルメンタル・アルバム部門にノミネートされた。

「ラテン・グラミー賞にノミネートされたことは、私にとって初めてなだけではなく、パラグアイという国にとっても初めてのことなのです。これは、将来を見通すことができる第一歩であり、すべてのパラグアイの音楽家の意欲を駆り立て、夢を追い求めることを可能にしたと思います。私は、このアルバムを通じて、パラグアイが持っている素晴らしいもの、それは他ならぬ音楽や文化ですが、ゆっくりと皆さんに示していきたいと思っています。ノミネートされてから表彰式までのプロセスを通じて、パラグアイという国が私のために存在しているように感じました。激励や、お祝いのメッセージが毎日のように送られてくることは、私にとって意義深いことでした。もちろん、私のアルバムがノミネートされたことを知ったときは大喜びしましたが、その瞬間は、その意味がよくわかりませんでした。候補にノミネートされたことが、冗談や幻想ではなく、現実であることを受け入れるのに、少し時間がかかりました。それが現実であると知ったのは、私が、表彰式のためにラスベガスにいた2012年11月15日のことです。アカデミーが企画したすべてのイベントに参加し、人々に会えたことは素晴らしいことであり、生涯忘れることのできない経験です」とロハスは語った。

「受賞者が発表された瞬間、私はナーバスにならず、穏やかな気分でした。今日私がここにいるのは、これまで努力してきたからであり、候補者に指名されたこと自体が私にとっては名誉なのです。私のアルバムの名前が読み上げられなかった時、私は同行してくれた仲間と抱き合いました。このような素晴らしい経験をするチャンスを与えてくれたことに満足しましたし、これからも努力を継続しようと励まされました」

ベルタ・ロハスとパキート・デ・リベーラは、来年も『バリオスの足跡』と題した3回目のツアーを計画している。

「去年は、コスタリカ、ホンジュラス、トリニダード・トバコ、ブラジル、プエルトリコ、パナマ、そしてコロンビアに行きました。アグスティン・バリオスが実際に旅行した多くの国で演奏したいと思っていますので、来年は、全部は無理としてもほとんどの国を終わらせたいと思っています」とロハスは言った。

パラグアイ国内で、できるだけ多くの教育施設を訪問することを希望している彼女は、学校訪問ツアーも計画している。

「訪問する町や学校によって、反応は違いますが、それに励まされて毎年続けてきました。音楽という芸術への認識を高める一方で、子供たちの目標や夢を実現するための興味を起こさせてきました。私のソロコンサートも継続して計画していますが、これは大好きな演奏活動ですし、自分にとって最も重要な活動だと思っています」

詳しくは、

http://www.bertarojas.com/en/
http://www.youtube.com/user/BertaRojasGuitar
http://www.paquitodrivera.com/

ベルタ・ロハス&パキート・デ・リベーラ
『Día y medio』(ON Music 84501 72207) 来日情

蜜蜂、マシーシ、前奏曲ハ短調、カアサパ、郷愁のショーロ、パラグアイ舞曲第1番、パイカライの想い出、君のいない夜、イパカライ湖畔に立ったときにインスピレーションを受けた美しい女性をイメージして書かれたノスタルジックな作品。優雅さを持った伝統的なパラグアイの“グァラニー”のリズムを反映している。アルゼンチンの作曲家ギジェルモ・ブレールが1945年に作曲した〈チョグイ鳥〉は、若くして死んだインディアンが、“オレンジの木の鳥”と呼ばれるチョグイあるいはナランジェロという名の青い鳥に生まれかわった伝説を曲にしたもの。この作品では、デ・リベーラの思い悩むようなジャズ・バラードのメロディーを、ベルタ・ロハスのギターがアルペジョで強調している。バリオスがバッハに触発されて書いた〈前奏曲ハ短調〉では、アレンジャーのマウリシオ・“ピンチ”・カルドーソ・オカンプが、メロディー・ラインで、バリオスとピアソラを融合させることによってギターとクラリネットの知的な対話を作り出している。エルミニオ・ヒメネスの〈木の独楽〉は1937年に作曲された作品で、子供の頃、独楽で遊んだ楽しい思い出をイメージした作品。デメトリオ・オルティスの〈君のいない夜〉は、作曲者が母に寄せた思いを主題とするグァラニー音楽である。このアルバムでは、さらにホセ・アスンシン・フローレスのロマンチックな〈チョーリ〉、マリオ・クラベル〈貴方と何時も一緒に〉、バリオス〈カアサパ〉、ノスタルジックな〈郷愁のショーロ〉、最後はバリオスが伝統的なリズムを使った〈パラグアイ舞曲〉を演奏している。クラシックギターとジャズ・クラリネットの競演が、良く知られた作品を、まったく新しいコンテンポラリーな響きに変えている。レオ・ブローウェルが作曲部門でラテン・グラミー賞にノミネートされ、ペペ・ロメロがベスト・クラシカル・アルバム部門でノミネートされたのと同時に、ベルタ・ロハスとパキート・デ・リベーラは、2012年ラテン・グラミー賞のベスト・インストゥルメンタル・アルバム部門にノミネートされた。